

横浜市インフルエンザ流行情報 11号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

《トピックス》

【警報発令中】報告数がさらに増加しました。

【概況】

横浜市全体の第5週(1月29日～2月4日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、**68.10**となり、第4週の63.79^{※2}よりもさらに増加しています。

年齢別では、15歳未満の報告が全体の7割以上を占めています。また、学級閉鎖等の報告は、第5週では小学校を中心に233件となり、急増した第3週、第4週をさらに上回っています。保育園での集団発生の報告も増えており、お子さんがいるご家庭での感染予防が重要です。

また、病院や高齢者施設等での集団発生の報告も続いています。各施設での持ち込み防止や感染拡大防止対策を徹底しましょう。

第5週は今シーズンで初めてインフルエンザ脳症の報告がありました。重症化についての十分な注意も必要です。

迅速診断キットの結果は、第5週では **A型 24.4%**、**B型 75.4%**と、B型が多く報告されています。例年と比べてB型の流行が早いため、一度B型にかかったことがある人がA型にも感染したり、A型とB型に同時にかかる可能性もあり、注意が必要です^{※3}。

今後も引き続き、正しい手洗い^{※4}等や、咳が出る時のマスクの着用及び早期受診などの対策^{※5}が重要です。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

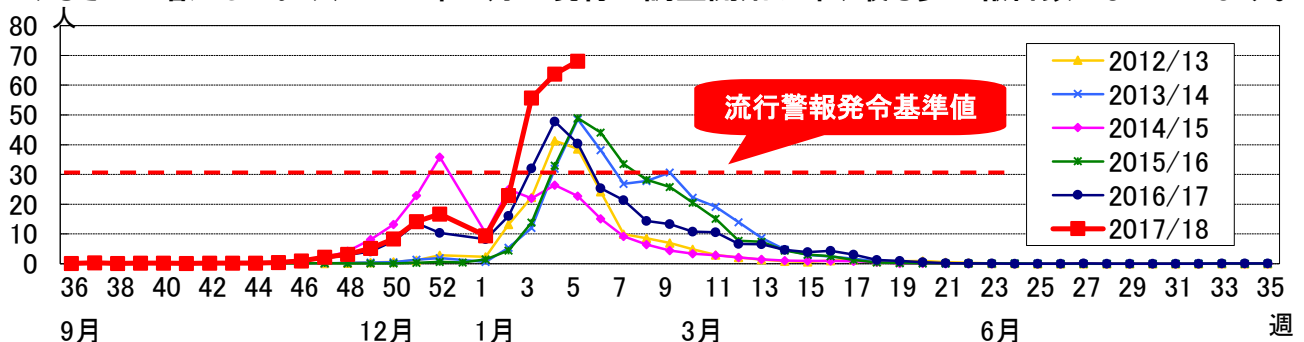
※2 追加報告があったため、以前お知らせした情報から報告数が更新されています。

※3 [2017/18シーズンの山形系統のB型インフルエンザ流行状況—横浜市](#)

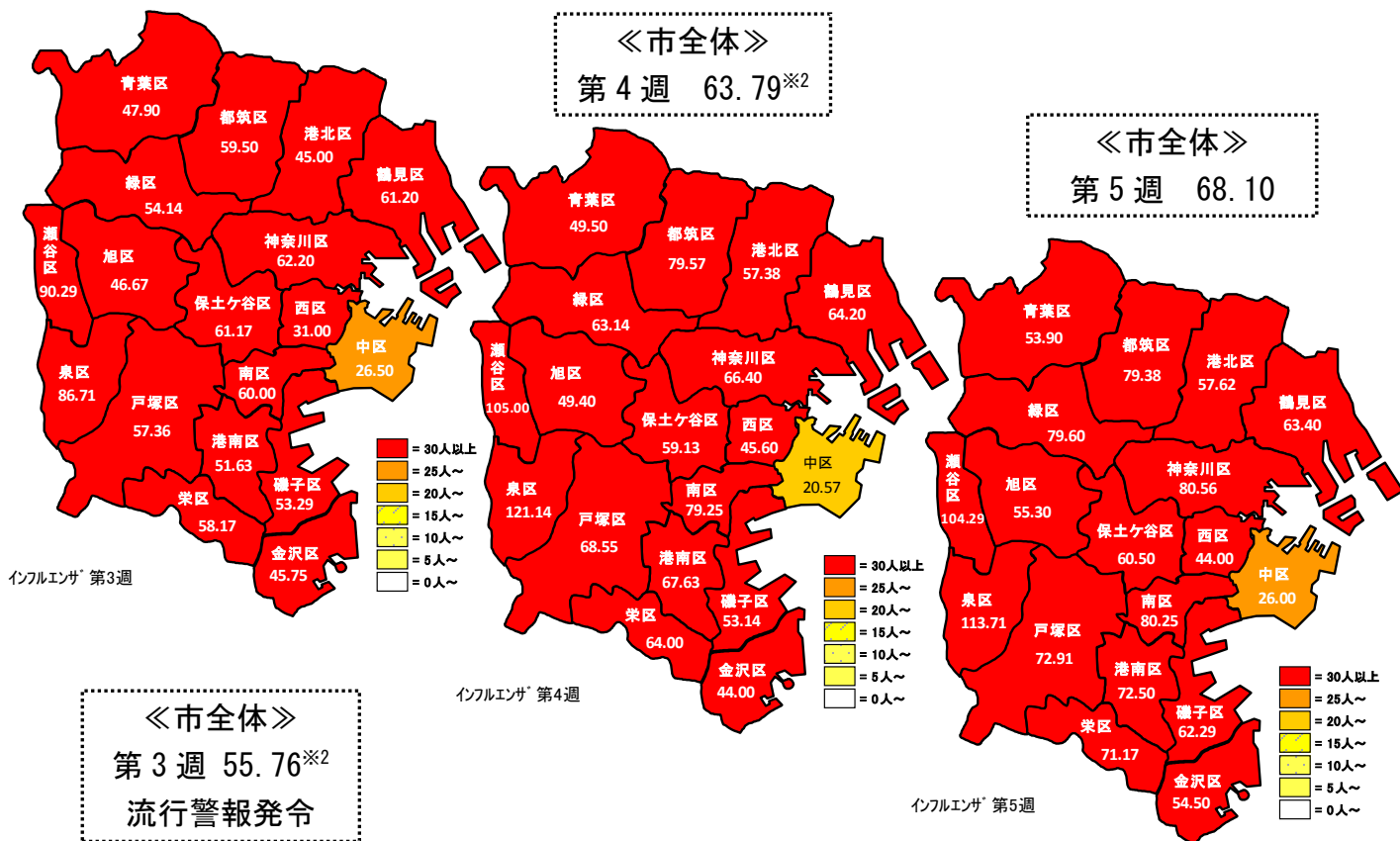
※4 [横浜市保健所ホームページ](#)(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご活用ください)

※5 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は、第5週(1月29日～2月4日)で68.10となりました。流行警報発令基準値(30.00)を上回った第3週の55.76^{※2}、第4週の63.79^{※2}よりもさらに増加しており、1999年4月の現行の調査開始以来、最も多い報告数となっています。

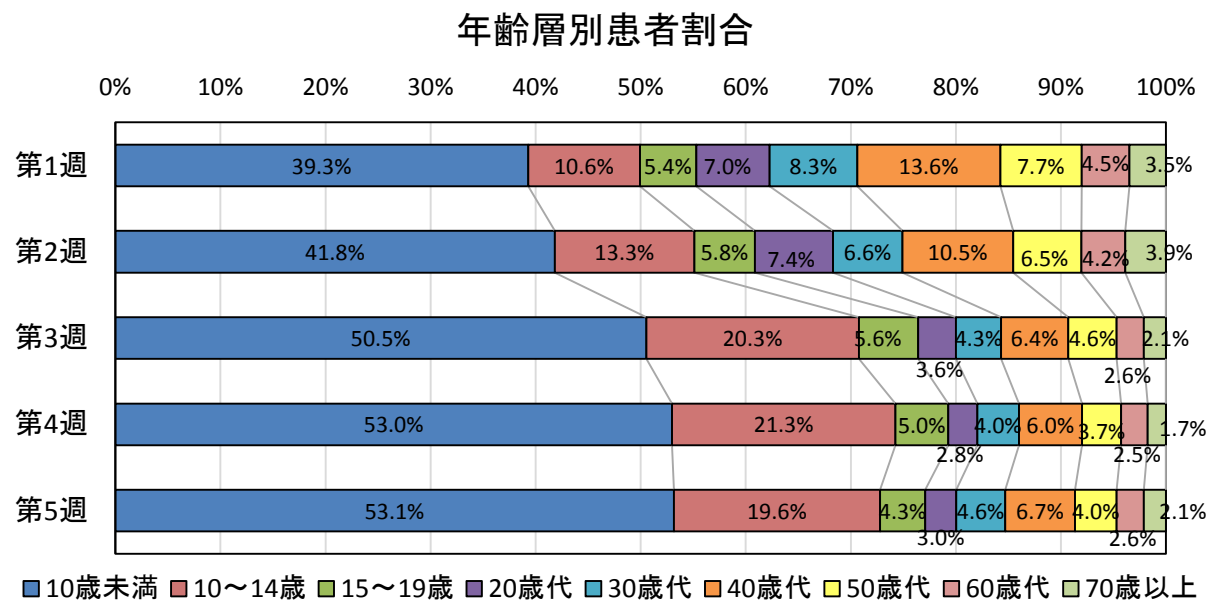


2 地図で表した直近3週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



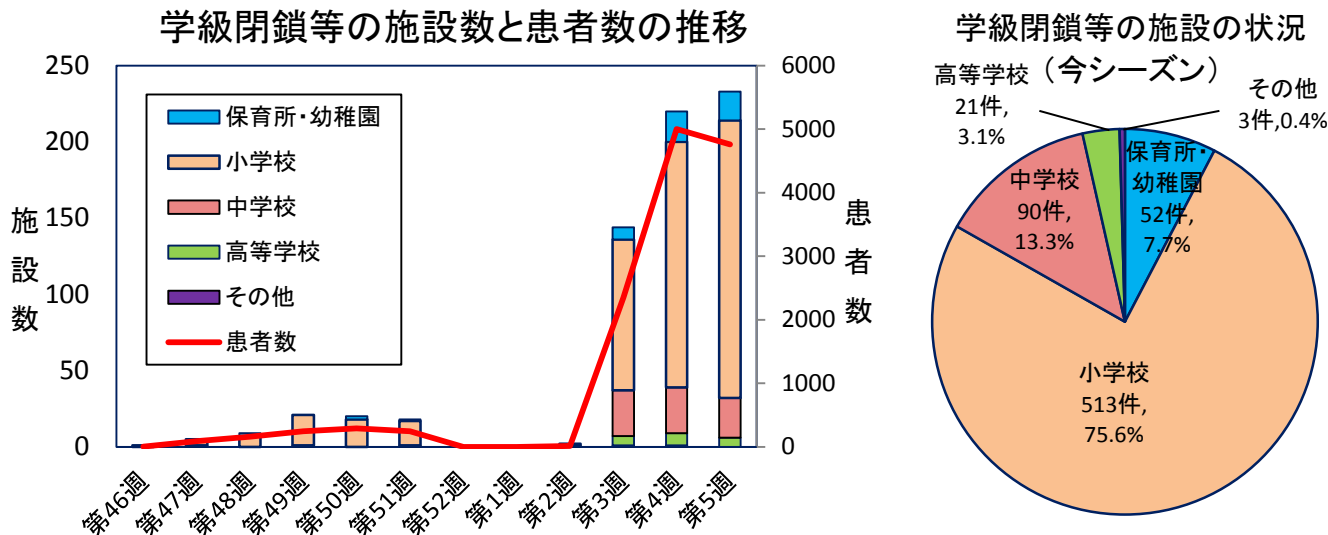
第3週にて、市内全体で定点あたり30.00を超えたため、流行警報が発令されています。流行警報は、警報継続基準値(10.00)を下回るまで続きます。
 昨シーズンは第3週に定点あたり32.23にて流行警報が発令され、第12週(2017年3月20日~26日)に解除されています。

3 年齢層別集計:第5週の患者年齢構成は、10歳未満が全体の53.1%、10歳以上15歳未満が全体の19.6%を占めており、15歳未満が全体の72.8%を占めています。また、60歳以上は全体の4.7%となっています。



4 市内学級閉鎖等状況:学級閉鎖等の報告は、急増した第3週と第4週をさらに上回り、第5週は233件(休校1件、学年閉鎖27件、学級閉鎖205件)となりました。患者報告数は4,761人でした。内訳は、保育所・幼稚園19件、小学校182件、中学校26件、高等学校6件です。

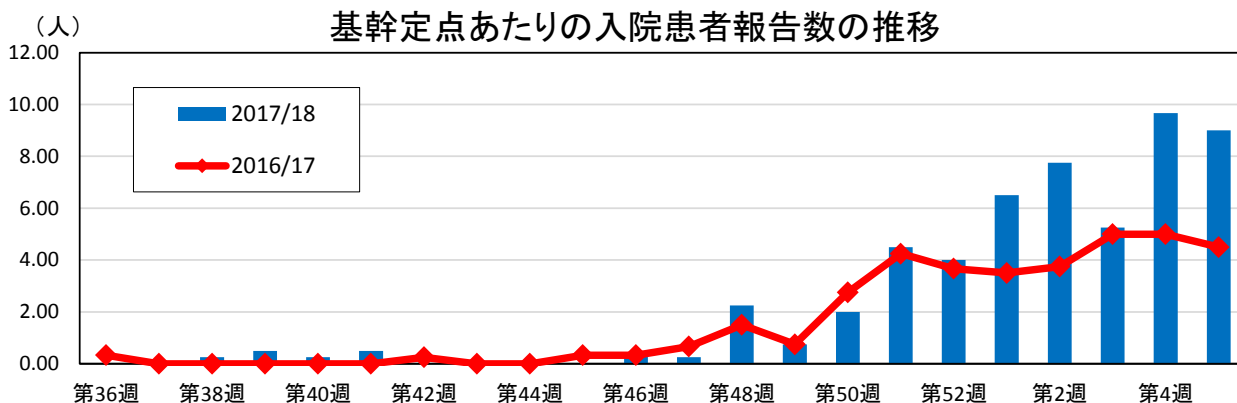
今シーズンの第5週までの報告は累計679件、患者数は延べ13,244人で、施設の割合は、保育所・幼稚園7.7%、小学校75.6%、中学校13.3%、高等学校3.1%、その他0.4%となっています。



5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※6}におけるインフルエンザ入院患者は、第5週は27人の報告があり、累計188人となりました。うち、15歳未満が43人、60歳以上が122人となっており、小児と高齢者の報告が多くなっています。

入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎やインフルエンザ脳症が疑われる入院患者は、第5週では7人の報告がありました。

※6 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。

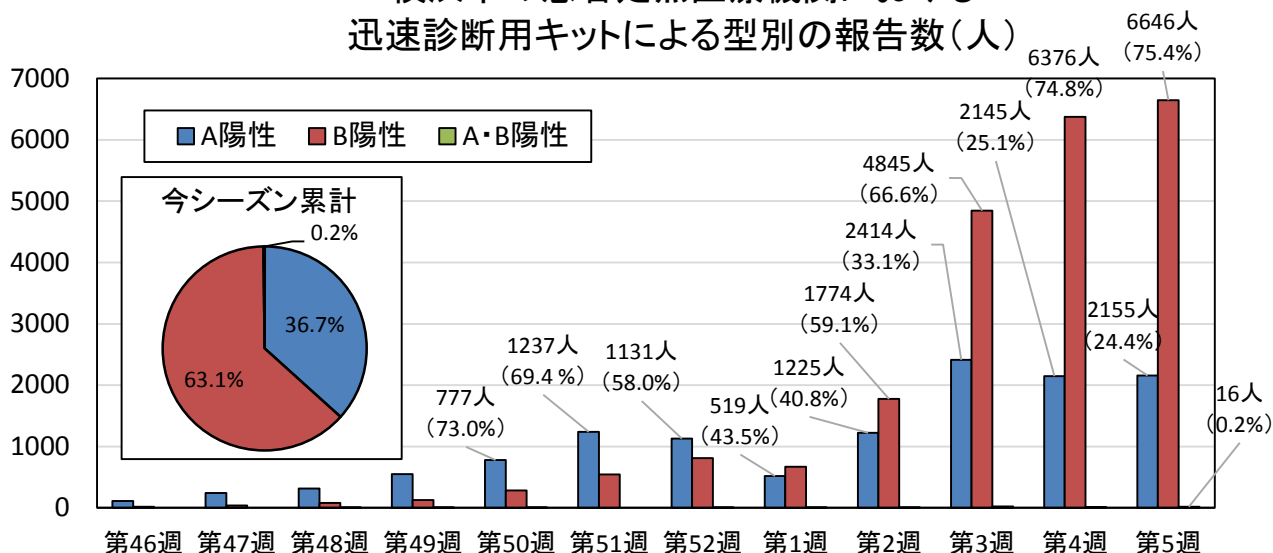


6 インフルエンザ脳症:市内医療機関から全数報告されている急性脳炎の中で、インフルエンザ脳症の報告が、第5週で2件(いずれも10歳未満で、A型1件、B型1件)ありました。今シーズンでインフルエンザ脳症の報告は初めてです。

患者報告数も依然として増加しており、今後も引き続き、重症化について十分な注意が必要です。

7 迅速キット結果:今シーズンの初めは A 型が多く報告されてきましたが、第 50 週頃より B 型の割合が増え始め、第 1 週で逆転しています。第 5 週の迅速キットの結果では、A 型 24.4%、B 型 75.4%、A・B 型ともに陽性 0.2%となっています。今シーズン累計は、A 型 36.7%、B 型 63.1%、A・B 型ともに陽性 0.2%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



8 市内病原体検出状況:市内では病原体定点^{※7}から AH1pdm(48 株)、AH3(29 株)、B(山形系統)(65 株)が分離・検出されており、主に AH1pdm と B(山形系統)が分離・検出されている状況です。B 型ウイルスの流行が早期に始まっていることから、A 型ウイルスとの再感染や重複感染にも注意が必要です^{※3}。

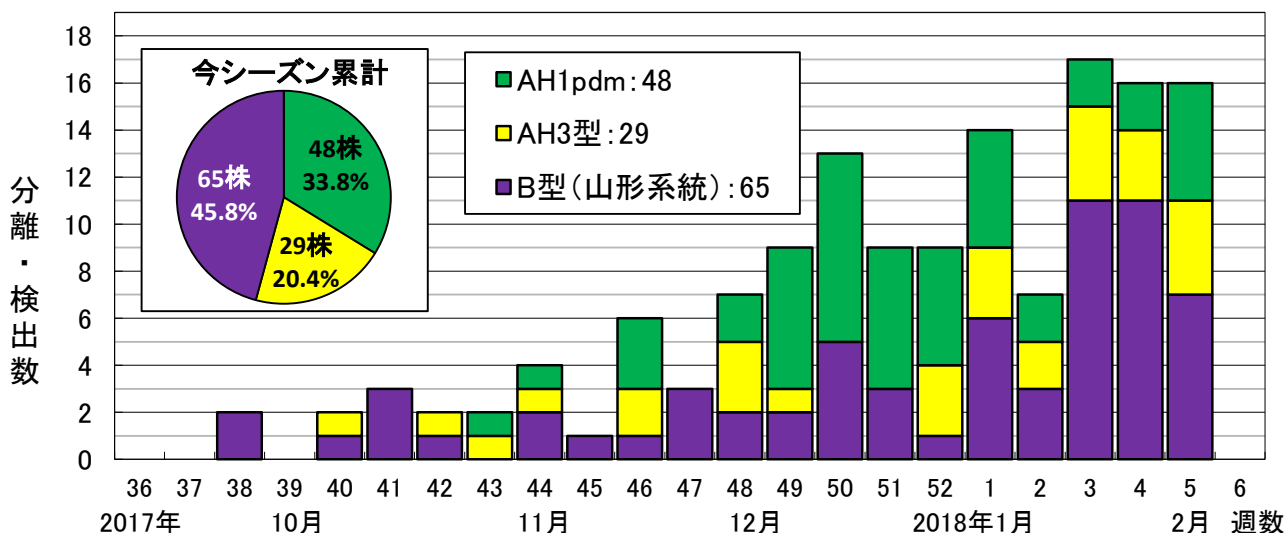
全国でも、主に AH1pdm と B(山形系統)が分離・検出されています^{※8}。

※7 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に 17 か所あります。うち、インフルエンザについては 12 か所にて採取されています。

※8 [週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数\(国立感染症研究所、2018年2月2日作成\)](#)

市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

(2018年2月7日現在)



9 分離株の抗原性解析:市内で分離された株(細胞培養した189株、2月7日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI試験)を実施しました。ワクチン類似とされているのは4倍以内です。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、AH3は、20株のうち17株が8倍以上で、AH1pdm(93株)とB山形系統(76株)は、すべて4倍以内となっています。これは、AH3の94%が8倍以上で、AH1pdmおよびB山形系統のすべてが4倍以内であったという国立感染症研究所の結果^{※9}と矛盾しないと考えられます。

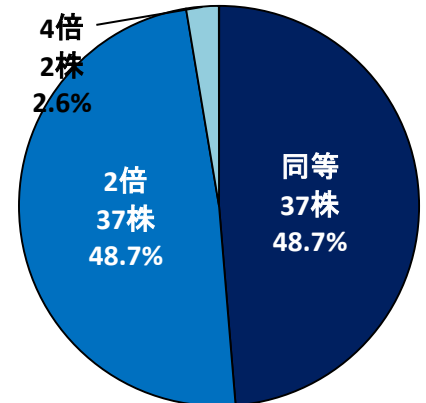
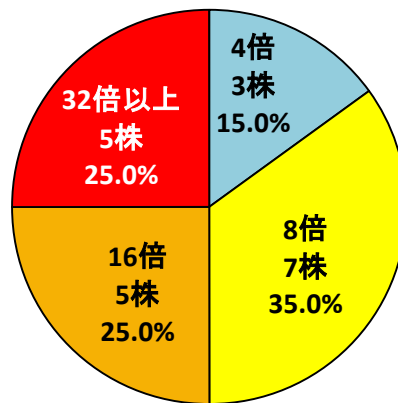
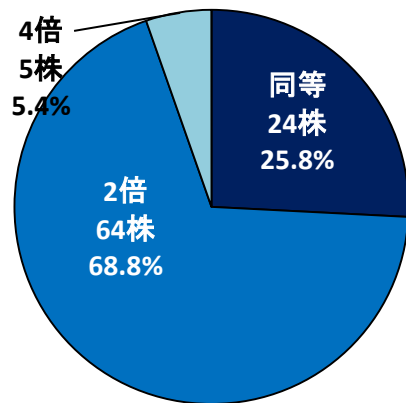
※9 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2018年1月29日\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析

AH1pdm 抗原性解析(93株)

AH3 抗原性解析(20株)

B山形系統抗原性解析(76株)



■ 同等 ■ 2倍 ■ 4倍 ■ 8倍 ■ 16倍 ■ 32倍以上

インフルエンザウイルス(AH3型)
の電子顕微鏡写真(3万倍)

撮影:
横浜市衛生研究所



※参考リンク 近隣自治体の流行状況 ○[神奈川県](#) ○[川崎市](#) ○[東京都](#)
全国の流行状況 ○[国立感染症研究所](#)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237
横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2445